

コミュニケーションアップ講座の効果と課題

小林 奈穂 美

はじめに

コミュニケーションとは、人と人が言葉や表情、文字、身振りなどを使って意思疎通を図ることである。21世紀の現在、サービス産業を中心とする第三次産業に大きくシフトしているという産業構造の変化と、グローバル化の中で文化や社会の多様性理解が求められる中、コミュニケーション能力の重要性がますます求められている。

他方、伝達手段のひとつであるインターネットの発達により、それぞれが自由に選択した、ソーシャルネットワークサービス (SNS) を使って、四六時中多くの人と繋がっている中で、若者たちを中心に「コミュ力」が高い、低いと自己評価することが散見される。しかしこれが意味するところは、伝え方のうまさや面白さに焦点が当てられ、多数の友達と広く浅く付き合うための手段であり、本来、意味するところである「相手の話をきちんと聞き、自分の考えを伝えながら互いの価値観の差を認めた上で協働する力」とは異なる力として広がっている現状がある。

I 企業に求められる能力

まず、ここで経団連(一般社団法人日本経済団体連合会)による企業アンケート結果について明示する。

経団連は1997年から企業の大学等の新卒採用活動に関する調査を実施しており、2017年12月に「2017年度新卒採用に関するアンケート調査」の結果を公表している。533社からの回答をまとめたものである。選考にあたって特に重視した点を20項目から5つ選択するという質問を行った結果が示されている。20項目を降順に列挙すると「コミュニケーション能力」「主体性」「チャレンジ精神」「協調性」「誠実性」「ストレス耐性」「責任感」「論理性」「課題解決能力」「リーダーシップ」「専門性」「信頼性」「柔軟性」「創造性」「潜

在的可能性(ポテンシャル)」「一般常識」「語学力」「履修履歴・学業成績」「留学経験」「その他」であった。最も多くの回答があった「コミュニケーション能力」は82%であり、「主体性」60.7%、「チャレンジ精神」51.7%となっている。この3つを重視して採用した企業が半数以上を占めており、さらに「コミュニケーション能力」に関しては、15年連続で1位であると記されている。いずれの企業も主体性やチャレンジ精神よりもまずは「コミュニケーション能力」を重視する企業が80%以上あるということである。

II 学校教育として取り組むべき能力としてのコミュニケーション能力

木下らが作成したコミュニケーションスキルを学ぶためのテキストによると「21世紀に入り、文化や社会の多様性や共存が現代の大きなテーマとなっています。このような時代においては、人々が互いを認めつつ、自己と他者の差異を超え、協働できるようなコミュニケーション・スキルをもつことは、大変重要になると考えられます。」¹⁾とあり、本来の意味としてのコミュニケーション能力と、大学で学ぶ意義についてふれている。

本学においても、「本学が育てるべき能力」が掲げられている。本学では5つの能力と16の能力要素から構成される「駿台社会人基礎力」を示し、在学中に「就業力」を身に付けるように指導している。授業を通じてそれぞれの要素を伸ばすことを授業の目標のひとつとしており、各教員が作成するシラバスの達成目標の中に、その授業でどのような「駿台社会人基礎力」が養われるのかを明記し、学生たちが具体的に意識できるようにしている。

「駿台社会人基礎力」を具体的に示すと以下のとおりである。

- (1)基礎的な力：①読解力,②文章力,③情報収集力
- (2)考える力：④論理的・多面的思考力,⑤情報処理能力,⑥理解力,⑦創造的発想力
- (3)行動に移す力：⑧主体性,⑨行動力・実行力
- (4)協働する力：⑩常識力（一般常識・マナー）,⑪プレゼンテーション能力・表現力,⑫コミュニケーション能力,⑬協調性
- (5)総合的な力：⑭課題発見能力,⑮計画力,⑯問題解決能力

いずれの能力・能力要素も学生時代からバランスよく身に付けることが求められる力である。その中でも(4) 協働する力の要素のひとつである⑫コミュニケーション能力は、講義形式の授業だけでは、身に付けることが難しい能力のひとつであり、キャリア教育科目の一部や、演習形式、実習形式の科目で達成目標のひとつとして掲げられている。

Ⅲ コミュニケーションアップ講座について

1. コミュニケーションアップ講座取り組みの経緯

このプログラムは本学の現代文化学部において、低学年向けの講座として、2012年より取り組んだ講座である。簡単に経緯について述べることにする。

①2012年度

取組課題：現代文化学部低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの開発

取組分担者：本間邦雄教授 廣野行雄教授 長谷川純一郎教授 岡田安芸子准教授

取組目的：取組の目的は、現代文化学部2年次必修科目である、キャリアデザイン（秋期開講）の授業改善と教育手法の開発と定着である。その手法は「対話」の積極的活用によるコミュニケーション力育成メソッドの開発である。期待する教育効果として、新しい人間関係を築き、他者との信頼関係を深めていくことへの意識づけを、対話を用いたワークを通して実現することが期待される。

取組方法と内容：卒業生というロールモデルを活用し、ワークを中心としたコミュニケーションプログラムを実施した。オリジナルテキストを使いながら、自分の考えを伝え、仲間と対話し、気づきと学びを共

有するという構成である。アンケート調査にて事前事後の変化を検証する。（資料①）今回は新カリキュラムの初年度であり、完成年度まで繰り返し実施することでその効果性を検証する。コミュニケーションスキルアップに焦点を絞った4回連続授業である点と、身近なゲストスピーカー（入社10年前後の本学卒業生）のプロフィールを取り上げることで、独創性と説得力のある内容であると考え。

効果：対象は2年次生134名であった。事前・事後アンケートを分析した結果、コミュニケーションに直接関わる項目について全体として、一定の効果が見られた。個別の効果についても、約65%の学生がコミュニケーションの大切さを意識し理解したという結果となった。特にロールモデルの活用は説得力という点から非常に効果的であった。

なお、本アンケートは、「駿河台大学コミュニケーションアップ講座測定尺度」である。授業の内容とテーマに照らし合わせ、自己信頼獲得への認識、他者信頼獲得への認識、将来(社会人)への展望、人間関係づくりへの認識というそれぞれについて、受講前後で学生の認識がどのように変化したか、プログラムそのものの効果性をみる指標として独自に設計したものである。次年度に向けたプログラムの改善や、その年の学生全体、男女別などの特性を捉えることができると思われる。

なお、このプログラムは平成24年度 社会人基礎力育成教育助成費が採択され実施したものである。

②2013年度

取組課題：現代文化学部低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの開発Ⅱ

取組分担者：本間邦雄教授 廣野行雄教授 長谷川純一郎教授 岡田安芸子准教授

取組目的：取組の目的は、現代文化学部2年次必修科目である、キャリアデザイン（秋期開講）の授業改善と教育手法の開発と定着である。その手法は「対話」の積極的活用によるコミュニケーション力育成メソッドの開発である。期待する教育効果として、新しい人間関係を築き、他者との信頼関係を深めて

いくことへの意識づけを、対話を用いたワークを通して実現することが期待される。

取組方法と内容：オリジナルテキストを用い、書くことで問いに答えながら自分の考えを表現する。それを4名1組または、2人1組のグループ双方で共有し合うという形式をとった。毎回、座席シートを配布し違うグループで対話ができるように工夫をした。そこに講師と学生との対話を加えた。昨年同様、卒業生というロールモデルと講師とのインタラクティブな場面を体感し、学生もその場面に加わるという内容を3回目に盛り込んだ。全体としてワークと対話を中心としたコミュニケーションプログラムとなっている。

2年次生必修科目であるキャリアデザインの授業なかで、連続して5回実施した。昨年度に作成した専用のテキストに修正を加え使用すると共に、必要に応じて補足プリントを使用した。受けとめた情報をもとに、自分の考えを伝え、仲間と対話し、気づきと学びを共有するという構成となっている。アンケート調査を用いて、実施前後の効果を測定し解析を行った。24年度に引き続き実施することで、その効果性を検証した。

2013年度は、プログラムの内容をさらに深めるために5回連続実施とした。コミュニケーションスキルアップに焦点を絞り5回連続授業という点と、身近なゲストスピーカー（入社10年程度の本学卒業生）のプロフィールを取り上げることで、独創性と説得力のある内容であると考えた。

効果：対象は2年次生148名であった。コミュニケーションスキルに関わる直接的な質問である5項目に対する全体の回答結果（有効回答87名）として、コミュニケーションに関わる直接的な項目について、以下のようなことが言える。

自分のことをありのままに伝える（問2）、自分の考えや気持ちを素直に伝える（問7）ことは意識付けがなされたと考えられる。

社会人に対する意識も、ある程度先入観が払拭されたと思われる。（問4）これは、3回目に卒業生をロールモデルとして登壇してもらい、身近な社会人

の体験談を聞き気づきが得られたものと解釈することができる。

しかし、自分のことを他人に理解してもらう必要性（問7）や相互理解（問11）については、講座によって意識付けがなされたとと言える結果には至らなかった。

また、5回の講座をすべて受講した学生54名に全体と同様の質問項目について、個別の変化を検証したところ、個別の変化については4人にひとり程度、一応の効果が見られた。

特に、5回連続受講で最も効果的だった項目としては、「社会人は都合の良いことやうわべばかりで本音は話さないと思う」に対して、否定的に回答する学生が増加したことであった。ただし、5回連続受講生は履修生登録者名148名中54名であったため、アンケート調査を用いて検証するには限界があった。

なお、前年の取組「現代文化学部低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの開発」は、4回実施であり、かつ外部講師や内容に変更があったため、アンケート調査項目は同様のものを用いたが、前年対比を行うことは適当ではないと判断した。

なお、このプログラムは平成25年度社会人基礎力育成教育助成費が採択され実施したものである。

③2014年度

取組課題：現代文化学部低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの定着と標準化

取組分担者：大貫秀明教授 長尾建准教授

取組目的：現代文化学部では、昨年度まで2年次生の学部必修科目であったキャリアデザインにおいて、学部独自の取組みとして「コミュニケーションアップ講座①～⑤」を実施し、大きな成果を納めてきた。そこで、今年度は、その「コミュニケーションアップ講座」において行っていた「対話」の積極的活用によるコミュニケーション力育成を、1年次生向けに応用し、実施することである。

本取組の実施によって、対話を通じたワークを何度も繰り返し行うことで、新しい人間関係を築き、他者との信頼関係を深めていくことへの意識付けが

できるようになり、人とコミュニケーションをとることの楽しさ、素晴らしさを実感できるようになる効果が期待される。

さらに、過去2年間の授業内容をもとに、「コミュニケーションアップ講座」の内容を標準化し、外部講師と同様の内容を、学部の教員も授業が展開できるようにするための、指導マニュアルの作成を試みた。

取組方法と内容:

第1回(12/4) 目的:モノの見方・考え方・価値観の多様性を知ること

方法:対話型鑑賞という方法を用い、ペアで同じ絵を見て感想を言い合ったり、吹き出しにセリフを入れて見せ合ったりする。ライフラインチャートを使ったペアワークなどを実施する。

第2回(12/11) 目的:第1回目の内容に加えて、さらに気づきを強化する

方法:同じ文章(ある程度ボリュームのあるもの)を読んで感想を言い合う。

第3回(12/18) 目的:身近な先輩からターニングポイントについて学ぶ

方法:就活を終えた学部4年次生をゲストスピーカーとして招き、インタビューを行う。

第4回(1/8) 目的:ターニングポイントを意識して自分のキャリアに前向きになる

方法:キャリアデザイン・ワークブック(2013版)P40~41のワークを行い、仲間と相互インタビューを行う。

※キャリアデザイン・ワークブック(2013版)とは昨年度、本学の社会人基礎力育成教育助成費にて作成したオリジナルテキストのこと

第1回と第2回は1教室で実施、第3回と第4回は2教室に分かれて実施した。第3回には、就職活

動を終えた4年次生6名をゲストスピーカーとして招き、大学生生活について語ってもらった。

効果:対象は1年次生177名であった。第1回の最初に事前アンケートを、第4回の最後に事後アンケートを実施した。

アンケート結果より取組成果を検証する。有効回答数は、4回の講座に出席した男子74名、女子18名、合計92名である。

アンケート調査からコミュニケーションに関わる行動が、プラスに変化したのか、マイナスに変化したのか講座前と講座後を比較することとした。コミュニケーションスキルに関わる直接的な質問である5項目に対する回答結果の変化は以下のとおりであった。

問2:自分自身の性格や能力について、できる限りありのままに伝えようと思う。

回答:全体としては、変化なしが51%であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は35%であった。事前に「やや思わない」という回答は6%から事後5%に、事前に「思わない」という回答は1%であったが、事後には見られなかった。男女別では、男子には顕著な変化はみられなかったが、女子は半数に変化はみられなかったものの、マイナスに変化したものはおらず、変化したと答えた全員がプラスに変化しており、中でも4ポイントアップしたものが28%であった。

問4:社会人は都合の良いことやうわべばかりではなく本音で話すと思う。

回答:全体としては、変化なしの学生が34%であった。事前に「やや思わない」という回答は20%から事後9%となり、事前に「思わない」という回答は14%から、事後5%といずれも大きく減少した。男女別では、女子には顕著な変化はみられなかったが、男子は53%がプラスの変化をしていた。

問7:自分のことを他人に理解してもらう必要があると思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が52%であった。事前に「やや思わない」という回答は3%から事後2%となり、事前に「思わない」という回答は2%から、事後も2%といずれも変化が見られなかった。男女別では、男子には顕著な変化はみられなかった。女子は17%がプラスの変化をしていたが同時に17%がマイナスの変化をしていた。

問10：自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している。

回答：全体としては、変化なしの学生が51%であった。事前に「やや思わない」という回答は2%、事後も2%であった。事前に「思わない」という回答はみられなかったが、事後には、0.8%（1名）の回答があった。男女別では、男子には顕著な変化はみられなかったが、女子ではプラス、マイナスの変化がいずれも1段階と変化の度合いが低いという特徴がみられた。

問11：他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が57%であった。事前に「やや思わない」という回答は1%、事後も1%であった。事前に「思わない」という回答はみられなかったが、事後には1.5(2名)%の回答があった。男女別では、男子は24%がプラスの変化をしていたが、20%がマイナスの変化をしていた。女子は28%がプラスの変化をしており11%がマイナスの変化をしていた。

4回の講座とワークを通じて、自己開示の意識が生まれたようですが、問2や問4で特に顕著に見られたといえる。

毎回授業内振り返りレポートを書かせており、その内容や教室全体の観察からも、自分の思いを書くことに慣れてきたこと、毎回、4名または2名の小グループで会話をすることで、人に自分の考えを伝えること、人の意見を聴くことにも慣れた様子が確認できた。さらに人と話すことがおもしろい・楽し

いと書いた学生が14名いたことは、たいへん喜ばしい結果であったと考える。

よって本プログラムの実施により、当初の目標として挙げた「1. 他人との違いやその違いを創り出している価値観に気づくことができる」と「2. 違いを認めた上で、お互いを尊重し合える信頼関係の築き方を知る」について、一定の効果があったものと考ええる。

さらに第3回に行ったロールモデル(4年次生)の活用は、大変印象に残った回として多くの学生がコメントを書いており、目標であった「3. 先輩学生の生の声に触れることで、先入観や思い込みから自由になる」にも大きな効果が見られたと考えられる。なお、このプログラムは平成26年度「教育力の駿大」に向けた教育助成費が採択され実施したものである。

④2015年度

取組課題：現代文化学部低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの定着と標準化Ⅱ

取組分担者：大貫秀明教授 長尾建准教授

取組目的：現代文化学部では、昨年度に1年次生の学部必修科目である現代文化基礎講座Ⅱにおいて、学部独自の取組みとして「コミュニケーションアップ講座①～④」を実施し、「対話」の積極的活用によるコミュニケーション力育成を目指し、一定の成果を納めた。今年度の目標は、①4回すべて2クラス同時進行とし、外部講師と同様の授業を複数の学部教員が展開できるようにするための指導マニュアルをカスタマイズすること、②アンケートの分析結果を受け、「対話」の活用によるコミュニケーション力育成を、さらに踏み込んだかたちで実施することの2点である。

今年度も引き続き、対話を通じたワークを何度も繰り返すこと、新しい人間関係を築き、他者との信頼関係を深めていくことへの意識付けをし、他者とコミュニケーションをとることで得られる楽しさ、素晴らしさを実感することで、日常のコミュニケーションの在り方を変容させるきっかけを得る効果を期待する。さらに今年度は、アンケートの分

析結果を受け、他者理解にとどまらず、相互理解に繋がる内容になるよう外部講師と検討を重ねた上で実施することを目的とする。

取組方法と内容：12/3～1/7の4週にわたり本取組みを実施した（すべての授業で2～4名のワークと対話形式の内容である）。

第1回(12/3) 目的：①モノの見方・考え方・価値観の多様性を知る。②ノンバーバルコミュニケーションの効果を知る。

方法：①対話型鑑賞という方法を用い、ペアで同じ絵を見て感想を言い合ったり、吹き出しにセリフを入れて見せ合ったりした。ライフラインチャートを使ったペアワークなどを実施した。②相手が話しやすい態度・話しにくい態度を比較・実感できるペアワークを実施した。

※対話型鑑賞の前に、アイスブレイクを兼ね、対話に必要な聞き方（頷く、相手の目をみる、相手の言葉を繰り返す、質問する等の有無）を体験させ、相手が話しやすい聞き方を意識づけた。

第2回(12/10) 目的：モノの見方・考え方・価値観の多様性に対する気づきを強化した上で、相互理解の意味について理解を深める。

方法：同じ文章（ある程度ボリュームのあるもの）を読んで感想を言い合った。

第3回(12/17) 目的：身近な先輩からターニング・ポイントについて学び相互理解の重要性・キャリアへの影響力を知る。

方法：就活を終えた学部4年次生をゲストスピーカーとして招き、インタビューを行った。

第4回(1/7) 目的：相互理解を通して、自分のキャリア観が深まる効果を実感する。

方法：キャリアデザイン・ワークブック(2013版)P40～41のワーク（ターニング・ポイントをテーマにキャリアを振り返る）を行い、仲間と相互インタビューを行った。※キャリアデザイン・ワークブック(2013版)とは一昨年度、本学の社会人基礎力育成教育助成費にて作成したオリジナルテキストのこと。

第1回から第4回すべて、2教室に分かれて実施した。第3回には、就職活動を終えた4年次生6名をゲストスピーカーとして招き、大学生活について語ってもらった。

毎回、最後に振り返りとして、「わかったこと」→「自分の考え」→「新しい行動」と、論理立てて書くよう項目をいれたコメントシートを書かせた。

効果：1年次生177名であった。第1回の最初に事前アンケートを、第4回の最後に事後アンケートを実施した。

アンケート結果より取組成果を検証する。有効回答数は、4回の講座に出席した男子51名、女子15名、合計66名である。

アンケート調査からコミュニケーションに関わる行動が、プラスに変化したのか、マイナスに変化したのか講座前と講座後を比較することとした。コミュニケーションスキルに関わる直接的な質問である5項目に対する回答結果の変化は以下のとおりであった。

※()内の数字はすべて昨年のデータである。

問2：自分自身の性格や能力について、できる限りありのままに伝えようと思う。

回答：全体としては、変化なしが45%(51%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は32%(35%)であった。昨年より、プラスに変化した割合が若干減少した。

事前に「そう思う」という回答をした割合は29%から事後30%に、事前に「ややそう思う」と回答し

た割合は 48% から事後 47% となった。肯定的に思う傾向の割合は前後で変化がなかった。

事前に「やや思わない」という回答は 5% から事後 0% に、事前に「思わない」という回答は 2%、事後も 2% と変化は見られなかった。否定的に思う傾向の割合は前後で 5% 減少した。

男女別では、男子は変化なしが 51%、プラスに変化が 31%、マイナスに変化が 18% であった。女子は変化なしが 27%、プラスに変化が 33%、マイナスに変化が 40% であった。

男子に比べ女子にはマイナスに変化する傾向が見られた。

問 4：社会人は都合の良いことやうわべばかりではなく本音で話すと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が 50% (34%) であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 29% (49%) であった。昨年より、プラスに変化した割合が 20% 減少した。

事前に「そう思う」という回答をした割合は 3% から事後 8% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 21% から事後 20% となった。肯定的に思う傾向の割合は前後でやや増加した。

事前に「やや思わない」という回答は 0% から事後 2% に、事前に「思わない」という回答は 2%、事後も 2% であった。否定的に思う傾向の割合は前後で若干増加した。

男女別では、男子は変化なしが 45%、プラスに変化が 35%、マイナスに変化が 20% であった。女子は変化なしが 67%、プラスに変化が 7%、マイナスに変化が 26% であった。

男子は女子に比べプラスに変化する傾向で、女子はマイナスに変化する傾向が見られた。

いずれにしても、この講座によりプラスに変化するという効果は表れなかった。社会人に対するイメージが薄いことと、自分のことではないため想像力に乏しく、回答に苦労したのではと考えられる。

問 7：自分のことを他人に理解してもらう必要性が

あると思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が 48% (34%) であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 23% (28%) であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は 32% から事後 26% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 47% から事後 53% となった。肯定的に思う傾向の割合に変化はなかった。

事前に「やや思わない」という回答は 0% から事後 2% に、事前に「思わない」という回答は 2%、事後も 2% であった。否定的に思う傾向の割合は前後で若干増加した。

男女別では、男子は変化なしが 49%、プラスに変化が 20%、マイナスに変化が 31% であった。女子は変化なしが 47%、プラスに変化が 33%、マイナスに変化が 20% であった。

男子は女子に比べマイナスに変化する傾向で、女子はプラスに変化する傾向が見られた。

問 10：自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している。

回答：全体としては、変化なしの学生が 59% (51%) であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 15% (28%) であった。昨年より 13% 減少した。

事前に「そう思う」という回答をした割合は 56% から事後 42% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 36% から事後 47% となった。肯定的に思う傾向の割合は 5% 減少したが、それでも 89% が肯定的に捉えており、5 つの質問項目でもっとも高い割合であった。

事前に「やや思わない」という回答は 3% から事後 0% に、事前に「思わない」という回答は 0%、事後も 0% であった。否定的に捉える学生が、事前には 2 名いたところ、事後に、学生はゼロとなった。昨年は事後に否定的な回答者が 1 名いたことを考えると、講座の効果ありとして見てよいのではないかと思われる。

男女別では、男子は変化なしが 59%、プラスに変化が 14%、マイナスに変化が 27% であった。女子は

変化なしが60%, プラスに変化が20%, マイナスに変化が20%であった。

男子は女子に比べマイナスに変化する傾向で、女子は変化が見られなかった。

問11：他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が61%(57%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は15%(25%)であった。昨年より10%減少した。

事前に「そう思う」という回答をした割合は58%から事後50%に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は33%から事後36%となった。肯定的に思う傾向の割合は5%減少したが、それでも86%が肯定的に捉えており、問10同様、肯定的に捉えている傾向が強いと言える。

事前に「やや思わない」という回答は3%から事後0%に、事前に「思わない」という回答は0%、事後も0%であった。否定的に捉えた学生が、今年は事前に2名いたところ、事後にゼロとなったことと、昨年は事後に2名いたことを考えると、この項目も問10同様、講座の効果ありとして見てよいのではないかと思われる。

男女別では、男子は変化なしが65%, プラスに変化が14%, マイナスに変化が21%であった。女子は変化なしが47%, プラスに変化が20%, マイナスに変化が33%であった。

男子、女子ともにマイナスに変化する傾向であり、女子のほうがより顕著であった。

以上をまとめると、「自分の気持ちを素直に伝える」〈問10〉、「相互理解の必要性」〈問11〉で、昨年より、プラスに変化した割合は10%程度減少したものの、どちらの間も90%程度の割合で肯定的に回答しており、否定的な回答がゼロに変化した点は、講座の効果と捉えることができると考える。これは、コミュニケーション力とは「新たな現実・答えを他者と協働しながら創出していく力」であるということ、毎回違う相手に伝えること、聴くことを繰り返

返し実践することで、実感した結果だと考えられる。

さらに今回は、講師が2名、2クラス同時進行であったことが、アンケート結果に影響があるかを検証した。

問2：自分自身の性格や能力について、できる限りありのままに伝えようと思う。

回答：7201教室のほうが、7202教室よりプラスに変化する傾向が強かった。

問4：社会人は都合の良いことやうわべばかりではなく本音で話すと思う。

回答：7202教室のほうが、7201教室よりプラスに変化する傾向が強かった。

問7：自分のことを他人に理解してもらう必要性があると思う。

回答：教室の違いによる変化はほとんどみられなかった。

問10：自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している。

回答：7202教室のほうが、7201教室よりマイナスに変化する傾向がみられた。

問11：他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う。

回答：7201教室のほうが、プラスに変化する傾向がみられた。

以上をまとめると、5つの問を比較した結果、2つの問は同じ傾向がみられた。3つの間にプラスの傾向の強さの違いがみられた。対象が違うため比較することに限界があり、マイナスの傾向が顕著に出た教室はなかったことから、講師2名による2クラス同時進行に問題はなかったと考える。結果として、汎用性のある指導要領であると考えられる。

各回の授業内振り返りレポートから、そして、教室全体の観察からも、自分の思いを書くことに慣れ

できたこと、毎回、4名または2名の小グループで会話をすることで、人に自分の考えを伝えるだけではなく、人の意見を聴くことが大事であると気づいた様子が確認できた。自分、他人、先輩のターニング・ポイントについてのコメントが多く見られ、人との信頼関係を築くことで、それがキャリア形成に繋がっていくと意識できたのではないだろうか。人と話すことが楽しいと感じた学生が6名いたこともひとつの成果である。

よって本プログラムの実施により、当初の目標として挙げた「1. 他人との違いやその違いを創り出している価値観に気づくことができる」と「2. 違いを認めた上で、お互いを尊重し合える信頼関係の築き方を知る」について、一定の効果があったものと考えられる。

さらに第3回に行ったロールモデル(4年次生)の活用は、昨年同様、大変印象に残った回として多くの学生がコメントを書き、目標であった「3. 先輩学生の生の声に触れることで、先入観や思い込みから自由になる」にも繋がる効果が見られたと考えられる。

なお、このプログラムは平成27年度「教育力の駿大」に向けた教育助成費が採択され実施したものである。

⑤2016年度

取組課題：現代文化学部低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの定着と標準化Ⅲ

取組分担者：久我晃広准教授 長尾建准教授

取組目的：現代文化学部では、2年続けて1年次生の学部必修科目である現代文化基礎講座Ⅱにおいて、学部独自の取組みとして「コミュニケーションアップ講座①～④」を実施し、「対話」の積極的活用によるコミュニケーション力育成を目指し、プログラム開発と定着を試みた。今年度の目的は、「キャリア」に軸を置き、①導入で参加意欲を高める工夫を行うこと、②自己理解と他者理解を深めることに重点を置いたプログラムとすることの2点である。

今年度も引き続き、対話を通じたワークを何度も繰

り返し行うことで、新しい人間関係を築き、他者との信頼関係を深めていくことへの意識付けをし、他者とコミュニケーションをとることで得られる楽しさ、素晴らしさを実感することで、日常のコミュニケーションの在り方を変容させるきっかけを得る効果を期待する。アンケートの分析結果を受け、各自の将来への不安や心配を解消させるための工夫を行ったうえで、まず、自己理解を丁寧に行い、他者理解に繋がる内容になるよう外部講師と検討を重ねた上で実施する。

取組方法と内容：12/8～1/12の4週にわたり本取組みを実施する(すべての授業で2～4名のワークと対話形式の内容である)。

第1回 目的：①自己理解：自分自身の個性や将来のキャリアに対するイメージを確認・共有しながら、周囲とのコミュニケーションを通して自身の可能性や将来が切り開かれていくことを知る。②ノンバーバルコミュニケーションの効果を知る。③可能であれば、オンラインアンケート調査を実施し、本クラス全体の意識調査結果を共有する。

方法：①お互いの第一印象を言い合った後、自己紹介シートを用いて内面の紹介をしい、コミュニケーションで印象が変化することを実感できるペアワークを実施する。②相手が話しやすい態度・話しにくい態度を比較・実感できるペアワークを実施する。

第2回 目的：意思決定(職業選択)プロセスを知ること、漠然とした不安を軽減し、将来の可能性を拓く過ごし方及びコミュニケーションについて理解を深める。

方法：社会人インタビュー(事前課題)を実施し、複数回のペアワークを通して共有する。その後、自分自身の過去の意思決定プロセス(高校・部活・アルバイト選択のきっかけや理由)を振り返り、自己理解を深める。

第3回 目的：身近な先輩からターニング・ポイントについて学び、自己理解や他者理解の重

要性・キャリアへの影響力を知る。

方法：就活を終えた学部4年次生をゲストスピーカーとして招き、インタビューを行う。

第4回 目的：他者理解を通して、自分のキャリア観が深まり視野が広がることを体感する。
方法：キャリアデザイン・ワークブック(2013版)P40～41のワーク(ターニング・ポイントをテーマにキャリアを振り返る)を行い、仲間と相互インタビューを行う。
※キャリアデザイン・ワークブックとは2013年度、本学の社会人基礎力育成教育助成費にて作成したオリジナルテキストのこと

効果：1年次生212名であった。第1回の最初に事前アンケートを、第4回の最後に事後アンケートを実施した。

アンケート結果より取組成果を検証する。有効回答数は、4回の講座に出席した男子55名、女子27名、合計82名である。

アンケート調査からコミュニケーションに関わる行動が、プラスに変化したのか、マイナスに変化したのか講座前と講座後と比較することとした。コミュニケーションスキルに関わる直接的な質問である5項目に対する回答結果の変化は以下のとおりであった。

※()内の数字はすべて左が昨年、右が一昨年のデータである。

問2：自分自身の性格や能力について、できる限りありのままに伝えようと思う。

回答：全体としては、変化なしが46%(45% 51%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は34%(32% 35%)であった。昨年より、プラスに変化した割合が若干増加した。

事前に「そう思う」という回答をした割合は33%(29%)から事後38%(30%)に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は38%(48%)から事後39%(47

%)となった。肯定的に思う傾向の割合は前後でやや増えた。

事前に「やや思わない」という回答は6%(5%)から事後2%(0%)に、事前に「思わない」という回答は2%(2%)、事後も2%(2%)と変化は見られなかった。否定的に思う傾向の割合は前後でやや減少した。

男女別では、男子は変化なしが42%(51%)、プラスに変化が40%(31%)、マイナスに変化が18%(18%)であった。女子は変化なしが56%(27%)、プラスに変化が22%(33%)、マイナスに変化が22%(40%)であった。

女子に比べ男子はプラスに変化する傾向が強く見られた。

問4：社会人は都合の良いことやうわべばかりではなく本音で話すと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が43%(50% 34%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は43%(29% 49%)であった。昨年より、プラスに変化した割合が14%増加した。

事前に「そう思う」という回答をした割合は4%(3%)から事後11%(8%)に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は17%(21%)から事後23%(20%)となった。肯定的に思う傾向の割合は前後で増加した。

事前に「やや思わない」という回答は20%(0%)から事後22%(2%)に、事前に「思わない」という回答は16%(2%)、事後は6%(2%)であった。否定的に思う傾向の割合は前後で若干減少した。昨年と比較すると「やや思わない」という回答が特に多いという結果であった。

男女別では、男子は変化なしが45%(45%)、プラスに変化が42%(35%)、マイナスに変化が13%(20%)であった。女子は変化なしが37%(67%)、プラスに変化が44%(7%)、マイナスに変化が19%(26%)であった。

男女ともプラスに変化する傾向があり、また、今年は顕著な男女差がみられなかった。

問7：自分のことを他人に理解してもらう必要性が

あると思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が 43%(48% 34%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 33%(23% 28%)であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は16%(32%)から事後22%(26%)に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 50%(47%) から事後 43%(53%) となった。全体的には肯定的に思う傾向の割合に変化はなかった。

事前に「やや思わない」という回答は 6%(0%) から事後 2%(2%) に、事前に「思わない」という回答は 2%(2%), 事後は 4%(2%) であった。否定的に思う傾向の割合は前後で若干減少した。

男女別では、男子は変化なしが 42%(49%), プラスに変化が33%(20%), マイナスに変化が25%(31%)であった。女子は変化なしが 44%(47%), プラスに変化が 33%(33%), マイナスに変化が 22%(20%) であった。

問 4 同様、男女ともプラスに変化する傾向があり、また、今年は顕著な男女差がみられなかった。

問 1 0：自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している。

回答：全体としては、変化なしの学生が 59%(59% 51%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 28%(15% 28%)であった。昨年より 13% 増加した。

事前に「そう思う」という回答をした割合は31%(56%)から事後 40%(42%)に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 54%(36)%から事後 46%(47%)となった。肯定的に思う傾向の割合は前後で大きな変化はみられなかった。それでも86%が肯定的に捉えており、5つの質問項目でもっとも高い割合であった。

事前に「やや思わない」という回答は 4%(3%) から事後 0%(0%) に、事前に「思わない」という回答は1%(0%), 事後も1%(0%)であった。否定的に捉える学生が、事前には 4 名いたところ、事後に、学生は 1 名となった。昨年と同様の傾向で、この項目が

一番、講座の効果ありとして見てよいのではないかとと思われる。

男女別では、男子は変化なしが 58%(59%), プラスに変化が22%(14%), マイナスに変化が20%(27%)であった。女子は変化なしが 59%(60%), プラスに変化が 41%(20%), マイナスに変化が 0%(20%) であった。

男子はプラスにもマイナスにも20%程度変化した。

女子は顕著にプラスに変化しており、マイナス変化が見られなかった。

問 1 1：他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が 54%(61% 57%)であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 24%(15% 25%)であった。昨年より 9% 増加した。

事前に「そう思う」という回答をした割合は 38%(58%)から事後 46%(50%)に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は50%(33%)から事後34%(36%)となった。全体的に肯定的に思う傾向の割合は 8% 減少したが、それでも 80% が肯定的に捉えており、問 1 0 同様、肯定的に捉えている傾向が強いと言える。

事前に「やや思わない」という回答は 0%(3%) から事後 1%(0%) に、事前に「思わない」という回答は 4%(0%), 事後は1%(0%)であった。否定的に捉えた学生が、今年は事前に 3 名いたところ、事後に 2 名となったことは、この項目も問 1 0 同様、講座の効果ありとして見てよいのではないかとと思われる。

男女別では、男子は変化なしが56%(65%), プラスに変化が20%(14%), マイナスに変化が 24%(21%)であった。女子は変化なしが 48%(47%), プラスに変化が 33%(20%), マイナスに変化が 19%(33%) であった。

男子は、ややマイナスに変化する傾向であり、女子は顕著にプラスに変化する傾向であった。

以上をまとめると、「自分の気持ちを素直に伝える」

〈問 10〉は 1% 増, 「相互理解の必要性」 〈問 11〉で、昨年より、プラスに変化した割合は 8% 程度減少したものの、どちらの間も 80% 以上の割合で肯定的に回答しており、否定的な回答が極僅かであった点は、講座の効果と捉えることができると考える。これは、コミュニケーション力とは「新たな現実・答えを他者と協働しながら創出していく力」であるということ、毎回違う相手に伝えること、聴くことを繰り返し実践することで、実感した結果だと考えられる。さらに毎回書かせている授業内振り返りレポートから、今日分かったこと、それに対する自分の考え、その学びを今後どのような行動に繋げるかというコメントシートを論理的に書くよう指導したことは概ねできるようになったようである。そして毎回、4 名または 2 名の小グループで会話をすることで、人に自分の考えを伝えるだけではなく、人の意見を聴くことや聴き方を意識することが大事であると感じた様子が確認できた。話をすることで、自分の気づいていない自分を発見することが出来たというコメントもいくつか見られ、15分ずつ話すことが短く感じられる、4 回で成長した自分を感じたという意見もあった。

自分、他人、先輩のターニング・ポイントについて

のコメントが多く見られ、人との信頼関係を築くことで、それがキャリア形成に繋がっていくと意識できたのではないだろうか。

よって本プログラムの実施により、当初の目標として挙げた「1. 他人との違いやその違いを創り出している価値観に気づくことができる」と「2. 違いを認めた上で、お互いを尊重し合える信頼関係の築き方を知る」について、一定の効果があったものと考ええる。

さらに第 3 回に行ったロールモデル(4 年次生)の活用は、昨年同様、大変印象に残った回として多くの学生がコメントを書いており、目標であった「3. 先輩学生の生の声に触れることで、先入観や思い込みから自由になる」にも繋がる効果が見られたと考えられる。

コメントシート全体として、昨年よりこちらの意図した内容を消化できている学生が多かったと言える。

なお、このプログラムは平成 28 年度「教育力の駿大」に向けた教育助成費が採択され実施したものである。

以上①から⑤を表にまとめると、以下のようになる。

表 1. コミュニケーションアップ講座取り組みの経緯

	対象学年	科目名	講師	取組課題	助成金の種類
2012年	2年次/134名	キャリアデザイン(必修)の4回	外部講師B 1クラス展開	低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの開発	平成24年度 社会人基礎力育成教育助成費
2013年	2年次/148名	キャリアデザイン(必修)の5回	外部講師A 1クラス展開	低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの開発II	平成25年度 社会人基礎力育成教育助成費
2014年	1年次/177名	現代文化基礎講座II(必修)の4回	外部講師A+専任教員 1・2 回1教室 3・4 回2クラス展開	低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの定着と標準化	平成26年度 「教育力の駿大」に向けた教育助成費
2015年	1年次/177名	現代文化基礎講座II(必修)の4回	外部講師A+専任教員 2クラス展開	低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの定着と標準化II	平成27年度 「教育力の駿大」に向けた教育助成費
2016年	1年次/212名	現代文化基礎講座II(必修)の4回	外部講師A+専任教員 2クラス展開	低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの定着と標準化III	平成28年度 「教育力の駿大」に向けた教育助成費

すべてに共通する事項は、必修科目であること、駿河台大学教育助成費によるものであることの 2 点である。2012 年、2013 年は「キャリアデザイン」が学部科目として位置づけられていたため、ここで展開することとした。2014 年からはキャリア科目

群が専任教員による全学共通の必修科目に配置されたため、学部の基礎教育科目群の現代文化基礎講座 II において展開することとした。プログラムそのものが、当初から低学年次のためのプログラムだったこと、学部独自の取組としての価値があること、そし

て2年間の実績を発展させる場として、現代文化基礎講座Ⅱへの移行は最適であったと思われる。

発展した事項として、取組課題が「プログラムの開発」から「プログラムの標準化」となり、1クラス展開だったプログラムを2クラス同時進行となったことである。学生数増加により、1クラスでは「コミュニケーションアップ」という目的達成が難しくなった時期である。プログラムの標準化によって、同時に複数クラスで展開する必要に迫られ、指導の手引きを作成しながら、2014年より、外部講師1名、専任教員1名で行うかたちとなり、それが固定することとなった。

なお、以上2012年～2016年の分析に用いたアンケートは、研究に使用する同意を得た学生を対象としたものである。

2.2017年度駿河台大学教育研究センタープロジェクトによる取組について

本学では、大学全体の組織的な教育改善を進める体制を構築することを目的として、平成28年4月に駿河台大学教育センターが開設された。本取組は、研究センターが教育改革に関する取組を対象とし、公募型研究プロジェクトを公募したことを受け、過去5年間(2年次生2回、1年次生3回)のプログラムをさらに発展させ、将来的に広く普及させることを意識し、研究課題を「現代文化学部低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの定着と標準化Ⅳ」として応募し、採択されたものである。

その取組の詳細について述べることとする。

①プロジェクトの目的

現代文化学部では、3年続けて1年次生の学部必修科目である現代文化基礎講座Ⅱにおいて、学部独自の取組みとして「コミュニケーションアップ講座①～④」を実施し、「対話」の積極的活用によるコミュニケーション力育成を目指し、プログラム開発と定着を試みた。今年度の目的は、「キャリア」に軸を置き、①導入で参加意欲を高める工夫を行うこと、②自己理解と他者理解を深めることに重点を置いたプログラムとすることの2点である。

今年度も引き続き、対話を通じたワークを何度も繰り返し行うことで、新しい人間関係を築き、他者との信頼関係を深めていくことへの意識付けをする。他者とコミュニケーションをとることで感じる、楽しさ・違和感、それらを受け入れようと試みる過程で自分の視野が拡がり、多様な人と交流することの豊かさを実感することで、日常のコミュニケーションの在り方を変容させるきっかけを得る効果を期待する。アンケートの分析結果を受け、各自の将来への不安や心配を解消させるための工夫を行ったうえで、まず、自己理解を丁寧に行い、他者理解に繋がる内容になるよう外部講師と検討を重ねた上で実施した。

②対象科目と対象学生内訳

学部1年次必修科目：秋学期科目である現代文化基礎講座Ⅱ(木曜日1限)のうち、12/7、12/14、12/21、1/11の4回連続、2クラス同時で実施

1年次生：204名(うち8名は外国人留学生)

再履修生：29名(うち2年次生24名、3年次生3名、4年次生2名)

③プロジェクトメンバー：久我晃広(現代文化学部准教授)・長尾建(現代文化学部准教授)

④今回の工夫点について

ア.導入で参加意欲を高める工夫を行う

授業内にその日の振り返りを共有することができるようにと各回の最後にオンラインアンケートを実施した。グーグルフォームを使い、毎回の授業内容に即したアンケートを設計し、授業終了の5～10分前にQRコードを配布(中から後方着席者用)、前面スクリーンにも表示(前方着席者用)し実施した。

解答するための所要時間は1分程度がよいと考え、質問項目はシンプルに3つとし、その中で選択して答えるものとした。解答し始めた様子を見ながら、前面スクリーンに集計画面を示し、リアルタイムで棒グラフや円グラフが変化するようすを共有し、講師が解説を加えた。

3項目は以下のとおりである。

1. 講義内での自分自身の聞く態度について振り返り、該当する項目を選びましょう。(複数回答可)※選択肢は毎回共通項目

- 話し手の表情を見ながら聞く
 - うなずいたり、相づちをうちながら聞く
 - 表情豊か聞く
 - 相手から聞いた話の概要(自己紹介など)を覚えていて、正確に説明することは大体できた。
2. 授業の中で一番印象に残った話題はどれでしたか?
※選択肢は毎回の授業内容であるため、違う項目
3. この講座を通じてどんな自分になりたいと思いますか?(3つ選んで回答)
- 話すことがうまくなりたい
 - 聞くことがうまくなりたい
 - 自分を理解してもらえようになりたい
 - 他人を理解できるようになりたい
 - 多様なモノの見方ができるようになりたい
 - 将来に対する不安を軽減したい
 - その他

1年生のみで構成された7202クラスの回答率は、第一回は96.9%、第二回は76.4%、第三回は81.5%、第四回は70%であり、予想していたより回答率がよい結果となった。

学生にとってのメリットとして、リアルタイムで結果がわかること、お互いに誰の回答かはわからないが、自分と同じ意見の人、違う意見の人、それぞれの割合を見てこの授業の振り返りを共有することができることがあげられる。結果として、参加意欲に繋がったと考えられる。

学生にとってのデメリットとして、QRコードを取り込む環境のない学生には、疎外感を感じる事があげられる。

授業運営側にとってのメリットとして、毎回の授業単位で結果がわかるので、こちらの意図が学生に伝わっているかを即時に把握できること、次回や次年度への創意工夫の材料となることがあげられる。

また、紙で提出するものと違って、個人名が分からな

い分、精度の高い回答が得られるのではないかとということも考えられる。

授業運営側にとってのデメリットとして、強制力のあるものではないので、全員の結果にはならないことを考慮しなければならないこと、初回は学生も初めてだということもあり、何をするのか理解に多少時間を要し、講師が前面画面表示への切り替えがスムーズに行かないことなどもあり、時間管理が難しい点があげられる。

また、アンケート設計は再度見直す必要がある。3つ回答する項目は、「回答の検証」機能を使用し、必ず3つ答えるようにして、3つ答えないとメッセージがでるように設定することで精度があがると考える。

イ. 自己理解と他者理解を深めることに重点を置いたプログラムとする

第三回目「身近な先輩から学ぶ、ターニング・ポイント」では、各クラス3名、合計6名の先輩の選出に工夫をした。昨年までの人選では、内定を得ており、卒論提出準備を終えている学生から選んだため、優等生的な発言・経験談が語られたため心理的距離を感じ、自分事として捉えられない学生が生じた。そこで今回は、内定の有無は問わず、自身のキャリア・選択を自己決定できている学生とした。一般企業に内定を持ちながら、公務員試験を受け続けている学生、全国どこに行っても好きなスポーツを続けながら働けるように、医療事務の資格を取り敢えてパート・バイトとして働く選択をした学生など、正社員として就職することを選択していない学生を数名起用した。登壇する先輩には、一ヶ月前に登壇依頼を行い、全員から快諾をもらった後、メールにて、入学前の大学のイメージと大学生活について、就活前の就活のイメージと実際の就活のこと、そして、渦中にいたときはネガティブに捉えていたが、当時に振り返って考えると「必要な経験だった」とポジティブに捉えられるターニングポイントについて語ってほしいと伝えた。さらに、大学生活を漢字一文字で書いてもらい説明してもらった。

以上の工夫により、自己理解、他者理解が深まったか

否かは、今回導入した、オンラインアンケートを手掛かりとしたい。

オンラインアンケートの質問3「この講座を通じてどんな自分になりたいと思うようになりましたか？」(3つ選んで回答)で、選択肢は以下の7つであった。

- 話すことがうまくなりたい
- 聞くことがうまくなりたい
- 自分を理解してもらえるようになりたい
- 他人を理解できるようになりたい
- 多様なモノの見方ができるようになりたい
- 将来に対する不安を軽減したい
- その他

自己理解の回答率平均は約26%、他者理解の回答率平均は約29%であった。7202教室のオンラインアンケートでは、第三回の先輩登壇の回の自己理解の回答率が33.3%と平均を大きく上回った。先輩の話聞くことによって、自分も先輩たちのように自分を理解してもらえるように話せるようになりたいと感じたのではないかと考えられる。7201教室においては、顕著な変化は見られなかった。

オンラインアンケートの設問の限界としてそれぞれ、「自分を理解してもらいたい」「他人を理解できるようになりたい」であり、深まったかどうかを聞く設問ではなかったこと、3つ選ばず回答を終わらせてしまっているものが散見されるため、信頼性に欠けるデータとなってしまうことがあげられる。設計上、正しく選択しなければ先に進めない、終了できない、エラーメッセージが出るなどができることが望ましいが、学生が回答する際、注意を促しながら答えさせることで改善される余地はある。

いずれにしても、毎回、自己理解、他者理解の意識を持たせることはできたが、深まったかどうかを見ることまでは出来ないデータであった。次回に改良して臨みたいと考える。

⑤取組成果概要

ア. 第1回の授業の最初に事前アンケートを、第4回の授業の最後に事後アンケートを実施した。なお、以下の分析に用いたアンケートは、研究に使用する同

意を得た学生を対象としたものである。(資料②)

アンケート結果より取組成果を検証する。有効回答数は、4回の講座に出席した男子53名、女子22名、合計75名である。

アンケート調査からコミュニケーションに関わる行動が、プラスに変化したのか、マイナスに変化したのか講座前と講座後と比較することとした。コミュニケーションスキルに関わる直接的な質問である5項目に対する回答結果の変化は以下のとおりであった。

問2：自分自身の性格や能力について、できる限りありのままに伝えようと思う。

回答：全体としては、変化なしが51%であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は36%であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は25%から事後34%に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は40%から事後49%となった。肯定的に思う傾向の割合は前後で18%増加した。

事前に「やや思わない」という回答は4%から事後1%に、事前に「思わない」という回答は0%、事後も0%と変化は見られなかった。否定的に思う傾向の割合は前後でやや減少した。

男女別では、男子は変化なしが45%、プラスに変化が26%、マイナスに変化が15%であった。女子は変化なしが64%、プラスに変化が27%、マイナスに変化が5%であった。

女子は変化なしの傾向が強くみられ、男子はプラスにもマイナスにも変化する傾向が見られた。

問4：社会人は都合の良いことやうわべばかりではなく本音で話すと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が37%であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は46%であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は4%から事後16%に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は19%から事後28%となった。肯定的に思う傾向の割合は前後で21%増加した。

事前に「やや思わない」という回答は29%から事

後 14% に、事前に「思わない」という回答は 15%、事後は 10% であった。否定的に思う傾向の割合は前後で 20% 減少した。

男女別では、男子は変化なしが 34%、プラスに変化が 41%、マイナスに変化が 10% であった。女子は変化なしが 41%、プラスに変化が 50%、マイナスに変化が 9% であった。

男女ともプラスに変化する傾向があり、女子のほうがプラスに変化する傾向であった。

問 7：自分のことを他人に理解してもらう必要があると思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が 40% であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 45% であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は 15% から事後 33% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 58% から事後 43% となった。全体的には肯定的に思う傾向の割合に変化はなかった。

事前に「やや思わない」という回答は 11% から事後 8% に、事前に「思わない」という回答は 1%、事後は 1% であった。否定的に思う傾向の割合は前後で若干減少した。

男女別では、男子は変化なしが 38%、プラスに変化が 28%、マイナスに変化が 17% であった。女子は変化なしが 45%、プラスに変化が 46%、マイナスに変化が 9% であった。

男子より女子のほうが顕著にプラスに変化する傾向があった。

問 10：自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している。

回答：全体としては、変化なしの学生が 59% であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 22% であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は 35% から事後 56% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 53% から事後 29% となった。肯定的に思う傾向の割合は 3% と僅かに減少した。それでも 85

% が肯定的に捉えており、問 11 同様、肯定的に捉えている傾向が強いと言える。

事前に「やや思わない」という回答は 0% から事後 5% に、事前に「思わない」という回答は 1%、事後も 0% であった。否定的に捉える学生が、事前には 1 名だったところ、事後に 4 名となった。講座を 4 回受けたことで強い否定ではないが、「やや思わない」と捉えた学生がいたことは、気になるところである。

男女別では、男子は変化なしが 64%、プラスに変化が 26%、マイナスに変化が 10% であった。女子は変化なしが 45%、プラスに変化が 37%、マイナスに変化が 18% であった。

男子は変化なしの傾向が高いが、どちらかというところプラスに変化していた。

女子はプラスにもマイナスにも変化しており、特にマイナスへの変化が目立った。

問 11：他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う。

回答：全体としては、変化なしの学生が 56% であった。事前アンケートよりプラスに変化した割合は 26% であった。

事前に「そう思う」という回答をした割合は 37% から事後 43% に、事前に「ややそう思う」と回答した割合は 47% から事後 43% となった。全体的に肯定的に思う傾向の割合は 2% 増加し、86% が肯定的に捉えており、5 つの質問項目でもっとも高い割合であった。

問 10 同様、肯定的に捉えている傾向が強いと言える。

事前に「やや思わない」という回答は 0% から事後 1% に、事前に「思わない」という回答は 1% (去年 0%)、事後も 1% (去年 0%) であった。否定的に捉えた学生が、今年は事前に 1 名いたところ、事後に 2 名となったことは、問 10 同様、気になるところである。

男女別では、男子は変化なしが 56%、プラスに変化が 25%、マイナスに変化が 19% であった。女子は変化なしが 57%、プラスに変化が 29%、マイナス

に変化が14%であった。

顕著な男女差はみられなかった。

以上をまとめると、肯定的な回答が顕著に伸びたのは、問4「社会人は都合の良いことやうわべばかりではなく本音で話すと思う」であった。(事前23%→事後44%)であり、プラスへの変化も46%と最も高く、第3回の「身近な先輩から学ぶターニング・ポイント」の回の影響が大きく関わっていると考えられる。

次に顕著に伸びたのは、問2「自分自身の性格や能力について、できる限りありのままに伝えようと思う」であった。(事前65%→事後83%)

プラスへの変化45%と2番目に高かった問7「自分のことを他人に理解してもらう必要があると思う」はもともと肯定的に捉えており、事前、事後で肯定的回答が多かったが、プラスへの変化が伸びたことは、意義深いと考える。

問11「他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う」においては、プラスへの変化は2%であるが、もともと84%の学生が肯定的に捉えており、さらに86%に伸びたことは評価できる。

この4つの結果から、本プログラムの目的にひとつである、「自己理解と他者理解を深めることに重点を置いたプログラムとする」について、一定の効果があつたと考えられる。

これは、コミュニケーション力とは「新たな現実・答えを他者と協働しながら創出していく力」であるということ、毎回違う相手に伝えること、聴くことを繰り返し実践することで、実感した結果だと考えられる。

ただし、問10「自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している」においては、プラスへの変化はあまり高くなく、もともと88%の学生が肯定的に捉えている項目であったが、それが85%に減り、否定的な学生が出現した。この調査内容には限界があり、その原因を明らかにすることはできなかった。

さらに今回は、講師が2名、2クラス同時進行であったことが、アンケート結果に影響があるかを検証した。

問2：自分自身の性格や能力について、できる限りありのままに伝えようと思う。

回答：7201教室は39%、7202教室は33%がプラスに変化した。

問4：社会人は都合の良いことやうわべばかりではなく本音で話すと思う。

回答：7202教室は71%、7201教室は33%がプラスに変化しており、7202教室は顕著にプラスに変化していた。

問7：自分のことを他人に理解してもらう必要があると思う。

回答：7201教室、7202教室ともに45%がプラスに変化した。教室による違いはみられなかった。

問10：自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している。

回答：プラスへの変化の教室による差はほとんど見られなかったが、教室7202教室のほうが、7201教室よりマイナスに変化する傾向がややみられた。

問11：他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う。

回答：7202教室のほうが、プラスに変化する傾向がみられた。同様に7202教室のほうがマイナスの変化する傾向が見られた。

以上をまとめると、5つの問を比較した結果、問2と問7の2つの問は同じ傾向がみられた。問7では、7202教室で顕著にプラスになったのは、教室毎に違う3名ずつの先輩が配置されていたためではないかと考えられる。身近な先輩の話に影響されると考えられる。問10と問11は、7202教室のほうが、プラスにもマイナスにも変化する傾向が見られた。対象が違うため比較することに限界があり、いずれの回答にもマイナスの傾向が顕著に出た教室

はなかったことから、講師2名による2クラス同時進行に問題はなかったと考える。結果として、汎用性のある指導要領であると考えられる。

3. 今後の課題

以上、2017年に筆者が取り組んだプロジェクトである「現代文化学部低学年次生のための効果的キャリア教育プログラムの定着と標準化Ⅳ」を「コミュニケーションアップ講座」として実施したことについてまとめたが、目的である①導入で参加意欲を高める工夫を行うこと、②自己理解と他者理解を深めることに重点を置いたプログラムとすることの2点について、一定の効果が見られたと考えられる。1年次生のプログラムとしての定着と標準化についても、4年間の継続の成果として、指導の手引きを作成し、それを使いながら2クラス同時展開についても問題なく実施された。

一番の問題は、根本的なことであるが、4回連続出席者が決して多いとは言えないという点である。二番目の問題は、参加意欲を高める工夫は、グーグルフォームを活用した、オンラインアンケートを導入したが、前述したようにオンラインアンケートの設問の限界としてそれぞれ、「自分を理解してもらいたい」「他人を理解できるようになりたい」であり、深まったかどうかを聞く設問ではなかったこと、3つ選ばず回答を終わらせてしまっているものが散見されるため、信頼性に欠けるデータとなってしまったことがあげられる。設計上、正しく選択しなければ先に進めない、終了できない、エラーメッセージが出るなどができることが望ましいが、学生が回答する際、注意を促しながら答えさせることで改善される余地はある。いずれにしても、毎回、自己理解、他者理解の意識を持たせることはできたが、深まったかどうかを見ることまでは出来ないデータであった。次回に改良して臨みたいと考える。

三番目の問題として、話し手の技法のひとつである「アサーティブ」を意識させるところまでには至らなかった。相手の価値観や考え方が違うときに有用な考え方であり、自己理解、他者理解を深めることにもつながるので、次回のプログラムでは、「アサーティブ」

を意識したプログラムになるように改良する余地があると考えられる。

なお、2018年度にも、昨年同様、現代文化基礎講座Ⅱにおいて、「コミュニケーションアップ講座」を4回連続で12月に実施を計画している。

また、本稿の限界として、アンケート（事後）の自由記述欄「コミュニケーションや対人関係について、気づいたことはどんなことですか？思うままに書いてください」については分析するまでには至らなかった。この自由記述欄には、参加意欲や、コミュニケーションについての先入観や捉え方の変化や葛藤が顕在していると考えられ、非常に興味深いものである。是非、この自由記述の分析に挑戦したいと考える。

引用文献

1) 木下直子・木山三佳・徳田恵「学生のコミュニケーション・スキルの学び」2015年、実教出版、3頁

参考文献

一般社団法人 日本経済団体連合会「新卒採用に関するアンケート調査結果」
<<http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/096.pdf>>
(2018.8.12 参照)
松原達哉ら編集「産業カウンセリング辞典」日本産業カウンセリング学科監修、2008年、金子書房

資料

資料①コミュニケーションアップ講座
アンケート（事前）（事後）

コミュニケーション講座 アンケート（事前）（事後）

		学籍番号	名前				
あなたは、下の1～11の各項目に対してどのくらい当てはまりますか。最も当てはまるという選択肢番号に○をつけて下さい。			そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	やや思わない	思わない
1	働くことには辛さを感じることもありそうだが、できれば社会人になりたい、と思う。		1	2	3	4	5
2	自分自身の性格や能力について、できる限りありのままに伝えようと思う。		1	2	3	4	5
3	失敗や挫折は自信の獲得に不可欠だと思う。		1	2	3	4	5
4	社会人は都合の良いことやうわべばかりではなく、本音で話そうと思う。		1	2	3	4	5
5	自分には他人から認められるような魅力があると思う。		1	2	3	4	5
6	自分は社会人になって仕事を持つことに前向きだと思う。		1	2	3	4	5
7	自分のことを他人に理解してもらう必要があると思う。		1	2	3	4	5
8	少々困難があっても、自己成長や自信につながる取組に前向きでありたいと思う。		1	2	3	4	5
9	責任を問われるような役割を担うことにも挑戦していきたいと思う。		1	2	3	4	5
10	自分自身の考えや気持ちを素直に伝えることは、とても大切だと実感している。		1	2	3	4	5
11	他人とのつきあいにおいて、相互の理解が深まるような話は必要だと思う。		1	2	3	4	5

- 12 自分の将来を色に喩えると何色ですか？また、それはどうしてですか？

明るい ・ やや明るい ・ どちらでもない ・ やや暗い ・ 暗い

理由

- 13 普段のコミュニケーションや対人関係について、感じている課題はどんなことですか？思うままに記述してください。

資料②研究協力(授業内アンケートの使用)同意書

研究協力（授業内提出アンケートの使用）のお願い

皆さんが昨年、現代文化基礎講座Ⅱで提出されたアンケートの一部を私（小林）の研究に使用させていただきたく、ご協力をお願い致します。

【研究課題】

「コミュニケーションアップ講座の効果」に関する研究（仮）

【研究目的】

コミュニケーションアップ講座の前後に提出されたアンケートを分析し、4回の講座による教育効果について検証すること。特に、日常のコミュニケーション力に対する先入観や苦手意識などに注目し、対話を通じたワークを繰り返えし行うことで、事前アンケートと事後アンケートの変化を分析し、その効果について検討することを目的とする。

【使用をお願いする資料】

1. コミュニケーションアップ講座 アンケート(事前)

コミュニケーションアップ講座 アンケート(事後)

(対象は4回出席者およびコメント欄記入者)

※資料は厳重に管理し、匿名化して使用します。個人が特定されるかたちでの使用・公表や、研究目的以外への使用は致しません。

また、このデータ資料使用の協力を拒否・撤回しても不利益を被ることは一切ありません。

【連絡先】

駿河台大学現代文化学部 小林奈穂美

nkobayashi@surugadai.ac.jp (電話 042-974-7146 研究室)

.....

研究協力（授業内アンケートの使用）同意書

駿河台大学 現代文化学部准教授

小林奈穂美 殿

研究課題：「コミュニケーションアップ講座の効果」に関する研究（仮）

学籍番号: _____

氏名: _____

日付：2018年 月 日